

日本の持ち味を生かし、 国境を越えたリーダーの輪を広げたい



ベトナム事務所
浦山 友里恵
URAYAMA Yurie

民間企業を経て、JICA就職。研修事業部(当時)や筑波国際センター、青年海外協力隊事務局などを経験。資金協力業務部で約3年半留学生事業に携わる。9月よりベトナム事務所に勤務。

海外で学ぶ開発途上国の人々との出会いから、人材育成の重要性に目を向けるようになった浦山友里恵さん。政府開発援助(ODA)による留学生受け入れ事業をより魅力的なものにしたい。その情熱が国を越えた学びを支えている。

人材育成の真髄

与えるのではなく、皆が参加者

私は民間企業に3年間勤めた後、語学留学先のフランスでアフリカ地域などからの留学生に出会いました。彼らの考えや国の状況を知る中で、人材育成は、未来へのバトンだと思ふようになりました。国境を越えた学びに関わる人の流れを支えたい。そう思い、帰国後はJICAに就職しました。

最初に配属された部署では、中央アジア諸国向けの短期研修の受け入れを行いました。市場経済化の過渡期にある同地域から行政官を受け入れる中で、国づくりは人づくりから、ということを強く実感しました。

活気ある研修現場では、講師も同じ方向を見て学び合う一体感があります。この視点は、後に担当したJICAボランティア事業にも通じるものでした。JICAボランティアは、相手国の課題解決に貢献するというミッションを背負っていますが、その活動は、現地の人々との共創に他なりません。成果を残して帰国した多くの隊員の方々が「教えられることが多かった」と言っており、皆で何かを築き上げる過程を振り返る姿が印象的でした。

日本発、社会開発のリーダー育成 学位取得の過程で養う課題解決力

2013年から資金協力業務部で携わっ

た人材育成奨学計画(JDS)は、将来有望な若手行政官などを対象とする、無償資金協力による留学生受け入れ事業です。主にアジア13カ国を対象としています。日本で母国の開発課題に関する研究に励む留学生は、研究から論文作成までの過程で、問題を体系化して分析する能力や発信力など、課題解決に必要な力を鍛えます。この事業は学位取得が目的なので、期間が長く、日本のリソースを生かした人材育成と複層的な人の輪の拡大が実現できる点に面白みがあります。

日本を留学先に選んだ理由として、教育の質の他、先進技術や開発経験など、日本の社会・産業への関心を挙げる留学生も少なくありません。また、成功例のみならず、少子高齢化や環境問題など、日本は課題先進国でもあるため、社会開発を担う人材には貴重な学びがあるのです。

魅力的な留学プログラム作りは、受け入れ大学や運営を支援する実施代理機関との共同作業。簡単ではありませんが、帰国生の活躍や留学生からの事業に対する評価、また、受け入れ大学からの「日本の学生にも良い影響を与え、大学のプログラム開発や地域の活性化にもつながった」などの声が大きな励みとなります。

各国で活躍する帰国生も増えていきます。今年2月に出張したミャンマーでは、同国最高裁判所の留学経験者のうち、約7割を



JDS留学生の卒業式の日。彼らの活躍と、留学を通して形成されたネットワークが国際舞台上で生き続けることを期待する(撮影：一般財団法人日本国際協力センター)

占めるJDS出身者(昨年時点)が、組織に貢献していると聞きました。省庁で政策の策定に携わる副局長や日本企業の窓口になった若手職員などの帰国生にも会い、事業の意義を目的の当りにしました。

今後は修士課程に加え、博士課程への受け入れも開始します。学位取得の苦勞を乗り越える過程で、留学生が日本で礎を築き、経験を積んで人の輪を広げながら、リーダー・オブ・リーダーズになっていくことが楽しみです。今後も、ベトナム事務所JDSの人の輪に関わっていきたいと思います。



JDSの来日レセプションで、ベトナムからの留学生らと談笑した浦山さん(右から3人目)